# 作品「蓮月和歌十六首―早春―」について

土橋靖子
TSUCHIHASHI Yasuko

本作は江戸時代後期の尼僧で歌人でもある大田垣蓮月の和歌を、歌題を含め、平仮名と漢字で表記することをテーマに制作し、第六十五回現代書道二十人展に出品したものである。

同展において昨年出品した「千字文―和―」を受けて、実践的に和歌を題材に仮名と漢字の調和をはかった。

さらに仮名は今日的表現を鑑み、平仮名のみを用い、文字の重複や平易さから生じる単調さを、表情や字間の変化、線の太細などで回避するよう努めた。

また「散らし」においては、形式にとらわれることなく、まずは言葉の切れ目や歌のリズムを意識しながらも、自由に散らしてみた。その章法には、今までの、いわゆるタブーを無視したものもある。

たとえば、写本形式は別として、紙面に統一感を出す仮名の散らし書きの場合は、通常複数の行頭、特に隣接する行頭に漢字を重ねて用いない。また同じ文字は変体仮名を用いるなどして、重複を避

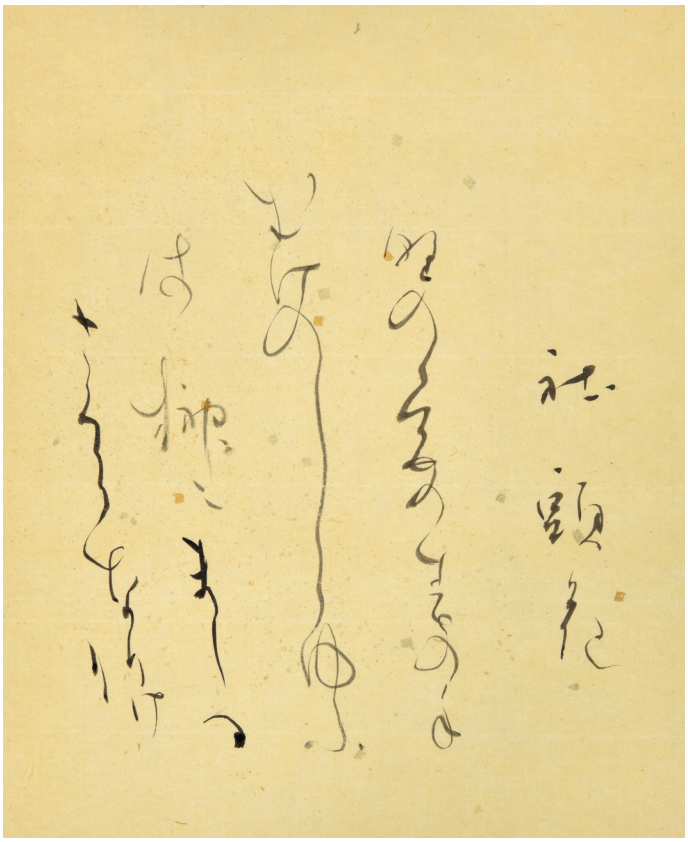
ける工夫をする。そういった常套手段を使わずして（図Ⅰ・社頭花、図Ⅱ・時雨　参照）、仮名本来の雅の風趣や、連綿、空間の美しさを汚さぬように表現できるか、また素直に歌意が視覚から伝わりやすいかなどを、自問しながら制作した。

十六枚の作品全様についても、様々な「散らし」の風情を出しながらも、錐で突くような隙の無い緊張感をあえて求めず、あくまでも自然体で、十六葉全体で完結するイメージを持ちつつ、清らで、心地よい世界を願った。

書き終えた今、平安朝の散らし書きの優品とされる三色紙なども、形骸にとらわれない独自な発想から生まれたと察するに至り、今さらながら、その美意識の高さと、当時としての革新性を強く感じた。

今後も古典古筆に立脚しながら、今日的な仮名、そして、和文の書の世界を引き続き求めていきたい。

【部分拡大】
図Ⅰ



社頭花　野の宮の春の手むけのしらふゆは
榊にまじるさくらなりけり

22㎝×18.6㎝

図Ⅱ

時雨　入相のかねの音羽の山おろし
はげしくふきてふるしぐれかな

22cm×18.6cm